（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　野上　志学

本論文は、「何が道徳的に正しいのかをわれわれは知っており、それに基づいて行為・判断するべきである」という、いわゆる「道徳主義」を批判し、何が道徳的に正しいのかをわれわれは知ることが出来ないという「道徳的懐疑主義」を認識論的な議論の枠組みを用いて論証することを目指したものである。大まかに言って、前半部の 1〜3 章は道徳主義に対する批判、そして後半部の 4，5 章はそこから導かれる帰結という構成になっている。前半部は、現在の最先端の研究領域を網羅し、数学的・論理学的モデルを駆使して道徳主義を批判する理論的な考察の部分であって、その目論見は成功していると考えてよい。後半部は、それを承けて、道徳懐疑主義がどのような帰結をもたらすのか、そして、それに対して、われわれはどのように向き合うべきなのかという実践的な問題が論じられている。そこでは、道徳的懐疑主義を容認することから導出されると考えられる「廃棄主義」（道徳に従わなくてもよい）という帰結を綿密な考察に基づいて斥け、道徳を「有益なフィクション」として維持し、かつ、それを彫琢するべきという積極的な提案がなされる。このような綿密かつ堅牢、そしてオリジナルな視点に富んだ議論の構成は、内外の研究においても希有なものであって、ここに本論文の独創的かつ今後の議論の展開に寄与することが大きいと審査委員会においても高く評価された。

論文全体の議論を概観するならば、序論で問題状況についての説明と今後の方針がなされ、第一章に道徳的懐疑論を外界懐疑論へと直結させ、後者の疑わしさから前者を否定するというオーソドックスな批判を斥けるために、この両者の間に論理的結びつきがないことを申請者は丁寧な文献読解および考察によって明らかにしている。この点だけを取っても、本論文の独自性は高く評価されるべきであると考える。第二章においては、これまでの議論を承け、「道徳的意見の一致」がどのような形で道徳主義を支えうるのかという問題を、数理的な手法を用いて鮮やかに解き明かし、「一致」は、道徳主義を擁護するには不十分という説得力のある結論に達している。第三章は、それとは反対に「道徳的意見の不一致」がもたらす認識論的な重要性が、同じく、論理的に明解に提示されている。これまでの議論をもって道徳主義を支持する有力な主張は成立し得ないことが明らかとなり、道徳懐疑主義の可能性が示される。第四章においては、道徳懐疑主義にとって有力な対抗者となりうる「構成主義者」の議論が吟味されるが、ここでも綿密な考察により、それが斥けられ、ここに道徳懐疑主義の妥当性が示される。そして、最終的に、第五章において、道徳懐疑主義が導くと思われる「保守主義」（道徳懐疑主義が正しいとしても、既存の道徳は保持されるべきという立場）、「廃棄主義」（道徳主義が正しくない以上、既存の道徳は廃棄すべきという立場）の両者が否定され、「虚構主義」（道徳を有益なフィクションとして考える立場）が妥当な選択肢として示され、それについての考察がなされる。ここに、「道徳懐疑主義」という一見、ペシミスティックな理論への偏見が払拭され、（ポジティヴな意味における）虚構主義が提示される。

ここまで述べたように、本論文は、既存の枠組みを正確かつ丹念に議論した上で、そこに数理的な手法による正当化を施し、最終的に、独創的な見解を提出することに成功している点で本論文が高く評価されるべき価値があると考える。ただ、一方で、前半部の精緻かつ重厚な議論と比較すると、後半部、特に第 5 章の「虚構主義」が打ち出される論述に物足りなさが見られること、そして、論文全体の議論を貫く「懐疑」という概念について、さらなる考察が必要だったのではないかという疑念が審査委員会において提出された。その疑念に対する申請者の応答は、本論文において不足している部分を認めた上で、今後の議論の展開を明確に示しており、申請者の学問的誠実さを示すものとして審査委員会では評価された。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。